

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第133号



柿生郷土史料館との出会い

令和元年6月

柿生中学校 校長(柿生郷土史料館館長) 田中眞砂美

このたび、4月1日付けで教育委員会学校教育部から柿生中学校校長に着任いたしました田中と申します。柿生郷土史料館の館長に任命され、その責任の重さをひしひしと感じております。微力ではございますが、一生懸命に努めて参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

着任後、史料館を訪れましたところ、支援委員の皆様へ設立の歴史をひもときながら、館内に所蔵している文化財や資料を案内していただき、これまで、大切に保管されてきた様々な展示品や資料に大きな感銘を受けました。また、支援委員の皆様へ説明から、柿生の地域の文化と歴史の重厚な流れを教えてください、ますます、この史料館の果たすべき役割の重大さを感じているところです。また、このときに、柿生の歴史がわかる本を、とご紹介いただきました。現在、その中の故小島一也様の「麻生の歴史を探る」を拝読させていただいております。そこには、幼い頃に学んだ「弘法の松」のことや生徒に教えている万葉集の東歌「多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のここだ愛しき」の歌のこと、いつも通る駅前の道の古来からの役割のことなどが、詳細な調査とともに記述されていて、「ああ、こういうことだったのか」と地域の歴史と今の自分がつながることに不思議な楽しみを覚えることができました。そして、これまで史料館に携わってこられた皆様のご苦勞を感じながらも、だからこそ、皆様が育んでいらした、この地域の歴史と文化を未来に伝えていこう、という熱意につながっていくのだな、と実感いたしました。

これから、柿生郷土史料館が柿生中学校の生徒のみならず、地域の皆様にとっても、今ある自分を感じることができる地域の歴史と文化の発信基地となるよう、皆様のご協力をいただきながら、努力して参りたいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

多摩丘陵に残る 義経の面影 - 7

古沢の九郎明神社と義経(その1)

麻生観光協会理事 麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

前回、後白河法皇の娘・笹子姫のお話をしましたが、都より難を逃れ武蔵国に逃避した際、いったん古沢に落ち着き、それから高石の法雲寺の場所に庵を設けたと述べました。なぜ古沢だったのでしょうか？

想像たくましく推理すれば、都を離れるとき後白河法皇から古沢には源氏ゆかりの『もののみ』がいるので、訪ねて行くようにと指示されていたのかも知れませんね。

さてここで、桓武平氏の事について触れておきたいと思えます。

桓武天皇は、平安京を作った初代天皇として有名ですが、第五皇子に葛原(かづら)親王という人がおり、子の高棟王(たかたけ)と高見王(たかみ)の系統が臣籍降下して最も栄えました。

■高棟王の系統は公家として発展し、子孫から烏丸、安居院、西洞院、前回話した平時忠、清盛の室 時子、後白河法皇の女御 滋子などに繋がる一族です。

■一方高見王の系統は子に平高望(たかたけ)がおり、彼は9世紀末に上総介となって関東に下向し、そのまま武士身分となります。後に関東各地で勢力を張る平姓の武士はすべて高望の子孫で、その流れは坂東平氏と称されました。子に国香、良兼、良持、良文、良正など武門の棟梁として発展していきます。まさに関東武士は平氏の天下でありました。

高望の子である平国香は、常陸大掾・鎮守府将軍を歴任した武士で、常陸国に土着し真壁郡石田を本拠地としました。この国香の代に、関東に土着した平氏流武士の間で勢力争いが起き、その戦いの中で承平5年(935)国香は甥の平将門に殺害されてしまいます。やがて一族内の確執が京の政治勢力を巻き込む事態に発展し、その過程で将門は『朝敵』として朝廷より追討を受けることとなりました。

やむなく将門は『新皇』を名乗って関東で独立の動きを見せ、朝廷に対し公然と反旗を翻します。この『将門の乱』で、源経基(清和源氏の祖)、藤原秀衡(公卿藤原氏から武士に変身し下野国に土着)らと共に将門追討の功を立てたのが国香の子・平貞盛であり、その結果関東における桓武平氏流武士団の勢力は引き続き維持されることになりました。

しかし、時は移り将門の乱から約88年後に、房総半島で事件が起きます。良文の孫 平忠常は上総、下総に大勢力を形成し、朝貢を拒み徭役も供せず、長元1年(1028)安房に侵入して国守(平惟忠)を殺害すると言う『平忠常の乱』をおこします。(以下4面へ続く)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」第103話

禅寺丸柿誕生

小島 一也 (遺稿)

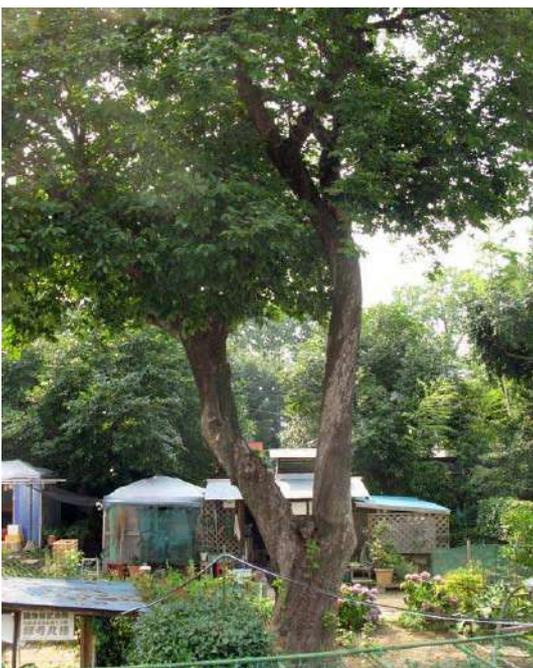
新編武蔵風土記稿は文化13年(1816)当時、幕府によって編集された歴史書ですが、その武蔵国都筑郡の「土産」の項に、「柿、王禅寺村より出ずるを尤も良しとす、今はそこにも限らず、おしなべてこの辺りを産とす、村民江戸へ運びて余業とせり、その実すぐれて美なり、もと王禅寺丸と唱うべきを上略して禅寺丸とのみ呼べり…」と、江戸時代中期には、広くこの地方に栽培されていたことを記しています。

降って明治44年(1911)都筑郡市ヶ尾村(現緑区市ヶ尾)の、農民であり作家の広田鉄五郎氏(花崖)は、友人の篤農家谷本眞司氏と共著で「禅寺丸柿栽培法」と題する著書を出版しております。これは、当時の神奈川農業試験場長(本間農学士)や県関係者の助力を得たもので、前々年(明治42年)王禅寺村の森七郎氏の柿が献納に浴し、同年販路を尾州(名古屋)枇杷島に求め、名声を博した頃の著作で、我が禅寺丸柿は柿実界の霸王と述べ、「原産の地を都筑郡柿生村大字王禅寺、蓋し禅寺丸なる名称の由って来る所以なり」と述べています。「今その来歴を究るに史の徴すべきものはなく、従って明確なる考証を為す能わざる遺憾ありと雖も、農家に存するところの、樹齢500年以上と言ひ伝ふる老樹多く 一略一 口碑の伝ふる處に依れば、今より690年前の昔なる建保2年、王禅寺中興開山等海上人、本堂再建用材選択の為、寺領、森林99谷奥深く尋ね入りしに、其風味の甘味なること、他に比すべきもあらず、上人大いに喜び、これを境内に接ぎ取り、農家に説きて植えしむ…」と、今に残る伝承を記しています。

柿は諸資料によると、日本・中国・朝鮮が原産と言われ、山野に自生していたものが突然変異により実を為し、果実となったものとされます。平安時代、当時の律令(延喜式 967年施行)下で行われた朝廷での祭礼には、その供物の中に栗子・桃子・柚子・枇杷子と並んで柿子(加岐)が水菓子と称して献上されていますが、その頃の加岐と称する水菓子は、甘柿・渋柿・干柿が混在し、品種も栽培も固定したものではありません。降って鎌倉時代末期(1290~1330)となると、野生柿と栽培柿は分類されていくようで、当時の庶民の生活を綴った「庭訓往来」(僧玄恵 1269~1350)には、柿の植樹を記述したところがあります。それには樹淡(キザハシ)木練(コネリ)の名称が現れておりますが、キザハシ・コネリとは甘柿のことを言い、その名の起こりは地方の品種の一つで、鎌倉時代柿の栽培が始まったことがわかり、室町時代(1336~1573)になると、各地に名産品が現れていきます。



王禅寺 禅寺丸柿原木



岡上梶司朗氏宅の禅寺丸柿—国登録記念物—

この禅寺丸柿について、昭和23年発行された、斯界の権威、京都大学菊池博士の「果樹園芸学」には、「神奈川県都筑郡には甘柿禅寺丸の老木が多い。その来歴は、順徳天皇の建保2年(1214)、今の星宿山王禅寺の再建に際し、材木伐採の時に偶然山中より発見し 一略一 今でも2~300年の老木が至る所に見られる」と記されており、奈良の御所柿、京都の豊岡柿、岐阜の蜂屋柿、広島西城柿など2~300年以上の栽培沿革を持つ柿の品種を紹介して、「西の豊岡、東の禅寺丸」と、その古木の栽培法、歴史の古さを紹介しています。

豊岡柿とは、現京都府木津市の「当尾の豊岡」と称する柿(京都府文化財指定)で、伝承では安元年間(1175~76)柿渋を採ったといい、現在でも500年以上の老木が残されているそうです。

名産禅寺丸柿の誕生は、応安3年(1370)王禅寺中興の祖等海上人の村民への甘柿栽培の奨励が始まりですが、その150余年前、建保2年(1214)、武蔵国都筑郡の山奥に甘柿が自生していたことは、前記、柿の沿革から言っても不思議はなく、その頃、承久3年(1221)、隣村の保木では薬師堂が建立され(県重文)、村人は相応の食文化を持っていたと思われ、九十九谷の野生の甘柿は、その頃から村人が食するものではなかったでしょうか。

後に江戸時代、禅寺丸柿は名実ともに日本最古の甘柿と称され、江戸の町で人気を呼びますが、これについては稿を改めたいと思います。

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「甘柿禅寺丸栽培法(広田鉄太郎)」「果樹園芸学(菊池秋雄)」「京都の文化財(京都府)」「郷柿誉悠久」

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(3)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆続・ランカスターとベルの教育法 ～クラス決めと進級の原理～◆

入学した生徒は、生徒として登録される際に、まず担当のモニターによって、読み書きと計算の能力が調べられます。その結果に基づいて、読み書きでは8段階のどこかに、計算では12段階のどこかに、割り当てられるのです。このため、読み書きと計算のそれぞれに、通常のモニターとは別にジェネラル・モニターと呼ばれるモニターの責任者が置かれ、彼らが全クラスのリストを持っていたのです。このリストには、試験の実施日や結果、さらには移動したクラスなどが、細かく記入されていました。現存するリストを眺めると、進級があくまでも個人の能力、学習到達度によって、決定されていたことがわかります。このことは、成績が上がらなければ、いつまでも同じクラスに留め置かれることになることも、示しています。現代の自動車教習所のシステムに似ているような気がします。

判定に合格すると上のコースに進めるシステムは、「学級制」と呼ばれて、19世紀の一定期間ですが、欧米において普及したクラス分けの原理となったのです。わが国でも明治前半期の学校は、この等級制の原理によって生徒の所属を決定していたのです。さて、当初父親の家の一室を借りて教室としていたランカスターの学校は、生徒が増えると手狭になり、別の場所に移転しなければならなくなりました。

ランカスターにとって幸いなことに、たまたまこの時期は貧民教化の必要から、ちょうど「貧しい子にも教育を…」という社会的要請が高まりつつあった時期だったのです。そのため彼は、ケント公に認められ、有力貴族たちの寄付を仰ぐことが出来たおかげで、比較的短期間に新しい学校を建設することができたのです。

彼の学校は、広い一つの教場となっていました。その点は、一つの空間からなっていた今までの学校と同じでしたが、修道会にも教会にも属しておらず、宗教界から完全に独立した初めての大きな学校だったのです。しかも当時の民間の学校は、教師の住宅と教場とが同じ空間でつながっていたのですが、ランカスター校は完全に分離されていた点で、まったく新しいタイプの学校だったのです。

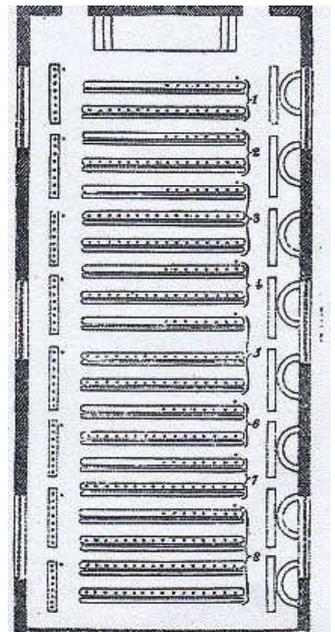
◆教室の風景◆

ランカスターの新しい教室は、広い単一の空間に、長机と椅子が整然と並べられたものでした。長方形の教室の正面に教壇が置かれ、そこには教師(マスター)が座って全生徒を見渡し、全体の様子を把握するのです。教壇に向かって長机と椅子が、平行に並べられています。教室は後方ほど高くなっていて、教壇から全生徒が見渡せるように工夫されていました。

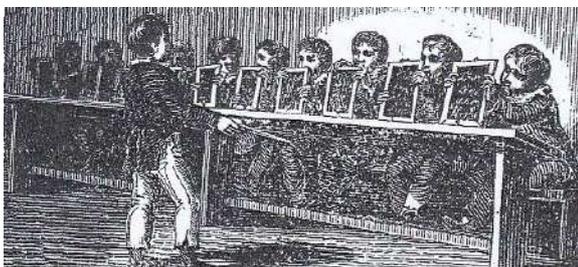
横並びの長机と椅子には、1~8とか1~12の数字が記され、この数字がそれぞれのクラスの場所を示していました。筆記を伴う授業はここで行われました。それはそうなのですが、この当時は、貧しい家庭の子どもたちが、筆記具や紙類(ノート)を持っているとは、考えられない時代でした。文字は備え付けの石版を用いて、そこに書いていったのです。

クラスを指導するモニターが読み上げた言葉や数字を、クラスの全員が石版に書き、モニターの「石版を見せなさい」の合図で、一齐に石版を立て、モニターの点検を受けます。読み方や暗算など筆記を伴わない授業は、教室の右側に作られた半円形の場所(「読み方の場」と呼ばれていました。)で、立ったままで行われたのです。生徒は、筆記を伴う授業と伴わない授業で、場所を移動したのです。午前中の読みや書きの時間と、午後の計算の時間で、所属するクラスが違っているのが普通だったのです。そのため、クラスの場所の移動を迅速に行えるようにする必要があり、読み方と書き方の時間を工夫して、移動の時間を取るようにしていました。ランカスターは、このことについて、「同じ場所で机に座り、2時間から3時間もの授業を受けることは、生徒に苦痛を齎すので、場所の移動を組み入れることによって、生徒に気分転換の時間を確保するようにしています。」と説明していました。

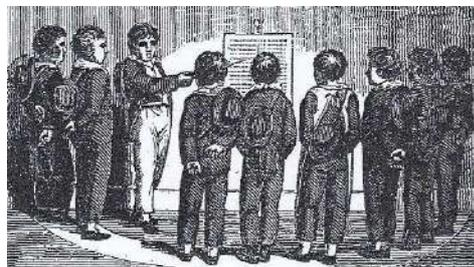
ところで、ランカスターの学校も、マドラス方式と呼ばれたベルの学校も、モニターを用いた段階的な教授法を採用している点は、共通していました。モニターには、自らが自発的に教えたり、複雑なことを教えたりする能力はありませんから、どのクラスで何を、どの時間に教えるかは、教師(マスター)自身が可能な限り単純化して、モニターに教え込むことが不可欠でした。モニターは、自分たちの監督者でもある教師(マスター)の指示と、与えられた教材というマニュアルに従って教えるだけの存在だったのです。それはまさしく教授活動に持ち込まれた、見事な分業制だったのです。(続く)



ランカスターの教室



モニターの声に合わせて、一齐に石版を見せる生徒



壁に掛けた教材を指しながら教えるモニター

(1面より続く)朝廷は、同じ平氏である平国香の子孫で北条氏の祖と言われる撰閔家の家人平直方を追討使に任じて派遣しましたが3年に渡り討伐できず武門の誇りを保てなかった。代わりに長元3年(1030)忠常を家人とする甲斐国守の源頼信を派遣。忠常は頼信の勢威に屈し戦わずして降伏、京都後送の途中美濃で病死しました。

名誉を失墜した平直方は武名の誉れ高い源頼信の嫡子 源頼義に自分の娘を嫁がせ武名を取り戻そうと考えます。源頼義と直方の娘の婚姻は相模国における直方の私的従者おも受け継ぐことになる招請婚(シヨウセイン)で、頼義も都にいた源氏ですが、直方の所領(相模国)を譲り受けます。相模を手にする事で東国に源氏の地盤を築くことが出来ました。頼義と直方の娘の間では三男二女を授かっています。【長男義家(八幡太郎義家)、次男義綱(賀茂次郎義綱)、三男義光(新羅三郎義光)】

平安時代末期は招請婚が一般的で父親の宅地(館と所領)は娘に伝わり、それが婿に渡るのが貴族社会の風習でありました。勿論すべての財産を渡すのではなく、館を譲ると言う形でありました。生まれた子供は母方で育てられ、男の子ならば男親の姓を名乗ることが許されました。現在の婿取りとはかなり違います。

これにより源氏が関東に進出する足掛かりとなったのです。

前置きが長くなりましたが、源氏と相模国との関わりを調べてみると、長元6年(1030)『平忠常の乱』を鎮圧するため東征した源頼信・源頼義親子が茅ヶ崎の懐島郷八幡村に京都の石清水八幡宮を創建し戦勝祈願を行ったことに始まります。(別に九州の宇佐八幡勧請説もあります)その後頼義は、前九年の役 天喜3年(1055)の際にも戦勝祈願を行い、康平6年(1063)反乱を鎮圧すると、鎌倉の由比郷に懐島八幡宮を勧請したと言われています。ここに源氏と鎌倉との縁が始まるのです。頼義の息子 義家は、後三年の役の際に祈願し、勝利したことから、寛治3年(1089)隣郷の浜之郷(現茅ヶ崎市浜之郷)に社領を寄進して現在の鶴嶺八幡宮を創建したといわれています。

この時に義家(八幡太郎義家)が自ら植えた公孫樹(仔杓)の木が大木となり、神奈川県指定の名木百選に指定され、天然記念物となっています。(この稿つづく)



樹齢 950 年と言われる大銀杏と鶴嶺八幡宮

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

6月 1・8・15・22日(毎土曜日)

7月 7・14・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (6月29日は休館です)

第80回 カルチャーセミナー

テレビ・新聞報道のオモテとウラ ～ 3億円事件報道を手掛かりに ～

脚本家、作家、そして1960年代後半からの主要な事件のほとんどを現場で取材した事件記者として著名な講師の多様な経験の中から、平塚八兵衛捜査主任を夜討ち朝駆けで取材した経験を持つ「3億円事件」を取り上げ、マスコミの事件報道のオモテとウラを縦横に語っていただきます。

講師の著書には『誰も知らない死刑の裏側』(二見文庫)、『捜査一課 謎の殺人事件簿』(二見文庫)などがあります。

日時: 6月8日(土) 午後1時30分～3時30分

講師: 近藤昭二氏(ジャーナリスト)

会場: 柿生郷土史料館特別展示室

第16回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その4 ～ 平成前期 ～

昭和30年創刊の地域のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿を紹介してまいりましたが、今回は昭和の終わりから、平成前期を中心に、人口急増期の地元の変貌の過程を紹介できればと考えています。

期間 3月3日(日)～6月15日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室